

豊中市学校教育審議会委員による諮問内容に関する主な意見（要旨）

論点	内容
理念等	今回の取り組みを学びの多様化学校だけに留めず、市内全体の学校教育の向上に資するものにしてほしい。本校が重視する多様性の包摂は一般校でも重要な課題であり、理念や具体的な手法の共有を期待している。
	子どもをどのように育てるかという視点が、第2回の配布資料から読み取れないため、議論を深めたうえで資料を再作成してほしい。
	AIの普及により、論理構成等の能力の重要性が変化中、教育も変わる必要がある。学びの多様化学校の議論は不登校支援に留まらず、これからの教育全体の骨子となる「人間力」を育むモデルになり得ると期待している。
運用等	学びの多様化学校へ転校した後、状況の変化により地元の学校へ戻りたくなった際の柔軟な対応が必要である。基本は卒業まで在籍する想定であっても、一人ひとりの状況を丁寧に見極める姿勢を重視すべきである。
	転校後「地元の学校へは基本的には戻らない」との事務局の想定について、子ども一人ひとりを意思決定のできる社会的存在とみなし、再考をお願いしたい。
	学校の立地が南側に偏っており、北側の生徒には通学の負担が大きい。公共交通機関で1時間程度かかる場合には、保護者の送迎も含め通いやすい手段を十分に検討すべきである。
	他市の義務教育学校等において、立地や内容面が原因で生徒数が減少した失敗例も参考にすべきである。子どもや保護者が「通いたい」と思える魅力的な学校にするため、場所の確定を含め、慎重な検討を進めてほしい。
	教室だけではなく、図書館やバーチャル空間等、他市の事例も参考に、多様な過ごし方ができる空間の確保を検討してほしい。
	入学希望者が定員を大幅に上回った場合、漏れた生徒への対応が課題となる。学校の設置だけでなく、地域の一般校が学びの多様化学校の要素を取り入れ、不登校生徒に対応できる体制へ近づけることが重要である。
	成功している他校の事例では、子どもの人数に対して非常に多くのスタッフが関わっており、本校でも体制の立て付けをどのように考えるかが重要である。
広報・周知方策	提示された資料が誰に向けたものかを意識すべきである。子どもたちにも理解できるように、「合科的授業」を「教科を横断した授業」と言い換える等、困難を抱える生徒本人が見て希望を持てる表現となるよう工夫してほしい。
教育目標	傷ついている不登校生の実情を鑑み、「夢を持ちなさい」という強制的な印象を与えかねない目標が適切かどうかを、一から検討し直すべきである。
	会議での議論を踏まえ、教育目標が「夢に向かって」から「自分らしい歩み」や「他者とのつながり」へと大きく転換した点を評価する。これをベースに複雑なカリキュラムや人員配置の検討を進めてほしい。
	到達点という結果だけでなく、そこに至るまでのプロセスや「自立」「自律」といった非認知能力を評価する視点が重要である。幼児教育の「ラーニングストーリー」

	<p>のような考え方を踏まえた教育目標にしてほしい。</p> <p>教育目標を定める際は、子どもの今の苦しみを理解し、目の前の子どもの状況を重視してほしい。</p> <p>現在示されている目標は、あくまで方向性を示したものであり、開校後、目の前の子どもの実態に合わせて、学校現場で教育目標を柔軟に変更できるようにしてほしい。</p>
めざす学校像・教職員像	<p>生徒の学力や意欲が様々である中、状況に応じた1対1の対応や教科担任制の柔軟な運用が求められる。複数の教員を配置し、教室外にいる生徒にも寄り添える充実した体制を整えていただきたい。</p> <p>事務局が提示した学級規模では全教科の教員を揃えることが困難であるため、国や府への働きかけによる加配や各種制度の活用が必要である。免許の壁を越えた柔軟な登用や教育課程の工夫により、質の高い授業メニューを確保すべきである。</p> <p>一人ひとり状況が異なる子どもたちに寄り添うには、相当な経験と力量を備えた教員が必要である。開校までの1年間で、どのように適切な配置と研修を進めるかが重要である。</p>
学校づくりのコンセプト	<p>教育目標等のソフト面だけでなく、学校の努力だけでは解決できない施設や教職員配置、研修等のハード面を、教育委員会がどのように支えるかを明記すべきである。それがひいては子どもを支える基盤となる。</p> <p>データ上、小学校から中学校への進学時に不登校が急増している。この大きな変化点に対し、小中一貫教育の充実や段差を緩やかにする具体的な施策を設けておくべきである。</p> <p>現在も様々な手立てが講じられているが、改めて不登校の発生原因を正確に把握し、そこから得られた示唆を、学びの多様化学校で何をめざすべきかという議論に生かすべきである。政策の妥当性を検証する視点が重要である。</p>
不登校児童生徒への支援の基本的な考え方	<p>特定の「学ぶ意欲がある子ども」だけを対象とするのではなく、多様な理由で傷ついている子どもたちを広く受け入れるという考えを堅持してほしい。</p> <p>他者との関わりに恐怖を感じている子どもに対しては、遊びや地域交流、幼児教育の視点等を通じて、社会や他者への信頼感を取り戻せる学校づくりをめざしてほしい。</p> <p>不登校の子を持つ保護者の孤立感は大きく、相談し合える場の提供は安心感に直結する。教員だけでなく、保護者同士の横のつながりをコーディネートできる専門的な人材の配置を検討すべきである。</p>
学びの多様化学校へのサポートと連携の取り組み	<p>「チーム学校」を単なる言葉に留めず、教職員が一人で抱え込まない体制を具体化すべきである。不登校の子どもたちの多様な背景に対し、具体的にどう向き合うのかという組織的な展望の充実を求める。</p> <p>個別のケースから学校全体、さらには福祉・医療・警察等の専門機関や、地域住民、保護者までを含めた多層かつ広範な「チームとしての学校」の構築を求める。また、現在の学年という横のつながりだけでなく、子どもの成長に合わせて支援を</p>

	継続させていく「縦」のチームづくりという視点も重要である。
	市全域から通学するため、従来の校区単位での連携は難しい。広域連携の工夫が必要である。医療機関や府の専門家等も含めた多層的なチームを想定し、通学距離や場面に応じた支援体制を、図解等で分かりやすく整理する必要がある。